

2018
おもろ
チャレンジ

「海の里山」での暮らしと NGO による植林活動の在り方を探る

文学部 4年
皆木 香渚子

ベトナム
2018年8月16日-
2018年10月15日



渡航概要と内容

今回の渡航では、1点目に「海の里山」とも表現されるマングローブ生態系を利用する地域住民の生活と2点目にNGOによる植林活動の在り方を明らかにすることが目的であった。

まず1点目であるが、今回の渡航によってマングローブ生態系がカンザー地区の中で現在果たしている役割を明らかにすることができた。

カンザー地区のマングローブ生態系は、二度も破壊の憂き目に遭っている。一度目は、ベトナム戦争である。壊滅的な被害を受けた後、一旦は政府による植林活動が功を奏して森林の被覆面積は回復傾向にあった。しかし1980年代に入ると、エビの養殖池の造営や薪炭材や建材として利用するための伐採が相次いだ。これが二度目の破壊である。1999年にはマングローブ林を守るために伐採が禁止され、2000年にはユネスコによって生物保全圏に指定され、カンザー地区は、伐採が一切禁止されている中心地域、持続可能な範囲での伐採が許可されている緩衝地帯、昔から開発が進んでいた移行地帯の3つに区分された。

これにより、地域住民は中心地帯や緩衝地帯に分け入り、マングローブ林自体を建材や薪炭材などとして直接的に利用することはできなくなった。渡航前に調べた先行研究によると、カンザー地区ではマングローブ生態系は水産資源獲得の場としてマングローブ生態系が作り出す環境のみが利用されているとのことであった。

カンザー地区を研究対象地域とした人文地理学的な先行研究では、カンザー地区のマングローブ生態系を利用した伝統的な生業としてマングローブ林内の水路で行われる漁労が紹介されている。しかし、これらの研究で対象としている地域は、カンザー地区内にある全部で7つある町村のうちの1つの村のみであったり、地区内の人口の4%のみが居住している中心地域および緩衝地帯である。また、これらの先行研究は最新でも2010年に投稿されたものである。経済成長の著しいベトナムでは、住民を取り巻く環境も刻一刻と変化しており、住民の生活水準を追うべ

く、最新の情報が求められる。そこで、今回の調査では、カンザー地区内の人口の90%以上が居住する移行地帯で、マングローブ生態系がカンザー地区において現在果たしている役割を明らかにしようと試みた。

聞き取りでは、合計74世帯から有効な回答を得た。カンザー地区内におけるマングローブ生態系の利用は、マングローブ林の葉や果実を利用する「**直接的利用**」とマングローブ生態系の作りだす環境を利用する「**環境利用**」とに大別できる。

直接的に利用されているのは、ニッパヤシ、ウラジロナツメヤシ、ベニマヤプシキ、マルバマヤプシキの4種類である。

・ニッパヤシ

葉の利用法：切って干した葉は屋根や壁の建築材料として用いられているニッパヤシの葉(写真1)を切り売りして生計を維持しているのは、一部のエビの養殖池を営む世帯である。エビの値段が安い雨季には、養殖池の経営をやめ、代わりに公有地のニッパヤシ林に分け入り、葉を切ってホーチミン市の都心部などで乾かした葉を販売しているという。

果実の利用：ニッパヤシの実(写真2)は、半透明で柔らかい果肉を砂糖水と混ぜたニッパヤシジュースとして用いられている。何らかの理由で失職した者や、現在就いている生業のみでは生活を維持するのが厳しい世帯が、副業としてニッパヤシジュースの販売を行っている。ニッパヤシは川沿いでよくみられる樹種であり、実を得るのが容易なため、ニッパヤシジュースの販売がこうした人々の職の受け皿になっていると考えられる。ニッパヤシの実は1つあたり30,000ドン(約150円)でカンザー地区の一食あたりにかかる費用とほぼ変わらない。1つの実からは数十個の柔らかい果肉を取り出すことができ、ニッパヤシジュースには1杯あたり5,6個の果肉が入って15,000(約75円)ドンである。1日あたり約20杯の売り上げがあるとのことであった。



写真1：手前に積み重なっているのはニッパヤシの実。奥にあるのはニッパヤシの葉でできた家。



写真2：ニッパヤシジュースを作るためにばらして半分に割られたニッパヤシの実

・ウラジロナツメヤシ

子葉の利用法：現在では高級野菜として扱われている。煮ても炒めても生でも美味しいのだそうであるが、伐採が禁止されて以来入手するのが困難になり、現在ではよく食卓にのぼる野菜の6~7倍ほどの値段がつけられている。

果実の利用：コーヒーに似た味がするため、1980年代まではコーヒーに混ぜて販売されていたそうである。現在では実はもう利用されていない。

・ベニマヤプシキ、マルバマヤプシキ(写真3)

果実の利用：食用、薬用。熟すと甘酸っぱい芳香を放つ。食べ方は、生でヌクナムにつけて食べたり、茹でてつぶし、果汁をスープに入れて食べる。薬として用いるときは生で実を丸々1つ食べる。蚊に噛まれて発熱した場合や、腹痛に効果があるという。カンザー地区内のリニョンという村では病院がなかった時代、ベニマヤプシキやマルバマヤプシキの実を薬代わりによく食べたようである。

なお、ニツパヤシを除いて食用としての利用を確認できたのは、カンザー地区の中でも経済的に後発であるリニョンのみであった。



写真3：熟したマルバマヤプシキの実

環境的利用としては、**漁場、水路、アナツバメの「飼育場」、観光資源**として用いられている。

漁場・水路としての利用：マングローブ林内の水路や干潮時にできる広大な干潟では、魚、カニ、イカ、エビ、貝、ナマコの採取が行われている。カニやナマコや干潟に生息する魚の採取には、大型の漁船や網が不要で、採取を始めるための初期費用がほとんどかからないため、カンザー地区内の最貧困層が主にカニや貝やナマコの採取に従事していることが分かった。採取の仕事は重労働・低賃金であることから、近年ではホーチミンの都心部で会社勤めを始める者が増えている地域もみられた。また、複数の河川の結節点に位置する地域ではカンザー地区内の採取者自体は増えていないが、隣接する省から採取に来るものの数が増えているという話があがった。ほとんどの漁師が漁獲量の減少を懸念していたが、漁業資源を保護するための規制がされているのは、カンザー地区周辺近海のみで、マングローブ林内では特に規制はされていないとのことであった。

漁業従事者に加え、漁業以外の職に就いている者からも、学歴や特別な技能を持たない者でも、職を得て生活を維持することができるのは、カンザー地区にマングローブ生態系があるおかげだという声が聞かれた。マングローブ生態系は、学歴や専門技術を持たず職を得るのが難しい層に現金収入獲得の機会を提供する重要な役割を果たしているといえる。

アナツバメの「飼育場」としての利用

カンザー地区内の複数の村では、アナツバメの飼育が行われている。(写真4)アナツバメとは、高級中華料理の具材であるツバメの巣を作る種類のツバメである。地面に降り立って餌となる虫をついばむことのできないアナツバメは、ひたすら飛び回って飛んでいる昆虫を餌として食べる。マングローブ林には、こうしたアナツバメの餌となる飛翔する昆虫が生息しており、マレーシアからアナツバメがカンザー地区にたくさん飛来する。それに気づいたマレーシア人男性が、マレーシアで行われているアナツバメ飼育の方法を15年前にカンザー地区でも試してみたところ大成功し、それ以来、カンザー地区の住民も真似をしてアナツバメ飼育が盛んになったと

いう。実際、建設中のアナツバメ飼育用のビルをあちこちで見ることができた。2006年からベトナムのGDPが大幅に伸びはじめ、アナツバメの巣の価格が上昇したことも、アナツバメ飼育を始める追い風になったようである。

アナツバメ飼育用のビルを建設するには日本円で約750万円が初期投資として必要である。カンザー地区の中間層の月収が約4万5千円であることを考えると、アナツバメ飼育を始めるには莫大な費用がかかることが実感できる。アナツバメ飼育をしている世帯は、長年貯金をしたり、土地を売却して初期投資にかかる費用を捻出している。

ここ5年ほどでは、ホーチミンの都心部の在住者がカンザー地区の土地を買ってアナツバメ飼育を開始するものの数が増えているという。実際、アナツバメ飼育用のビルを訪れても誰もいないビルの方が多く、近隣住民に尋ねてみると、ホーチミンの都心部で暮らしており、ビルに戻るのには月に1度ほどのみであるという話が聞かれた。アナツバメ飼育用ビルの管理をカンザー地区の住民にアルバイトで委託している世帯もみられたが、数は多くはなかった。アナツバメ飼育によって莫大な富を築く世帯があるものの、アナツバメ飼育の恩恵を享受できるのはほんの一握りであることが分かった。

以上のことから、カンザー地区のマングローブ生態系は最貧困層に職を供給する重要な役割を果たすと同時に、アナツバメの飼育を通してカンザー地区内外の富裕層にも経済的な恩恵をもたらしている。

最後に、観光資源としての利用について述べる。これは今回の渡航の第二の目的である、NGOによる植林活動の在り方を明らかにすることに関連している。



写真4：アナツバメ

観光資源としての利用：カンザー地区内には、マングローブ林を利用した自然公園が3か所ある。今回の調査では、各自然公園の来場者数を明らかにすることこそできなかったが、入場者数は年々増えているとのことであった。週末になると、大型観光バスが森林公園に乗り付け、ホーチミンの都心部の在住者や西洋人観光客がしばしば観光に来るといふ。

また、カンザー地区内での植林活動もエコツアーの「目玉商品」として広い意味での観光資源としての役割を果たしている。カンザー地区で主に植林が行われているのは、現在では放棄されている塩田である。放棄塩田で植林作業を行うのが、NGOや環境教育を目的として訪れるホーチミン市内の学校である。放棄塩田に行くには、Tam Thon Hiep村というところの港から30分ほど水路沿いを進んだところにある。港付近で住民に、NGOによる植林活動についての意見を尋ねると、意外な答えが返ってきた。今回参加したスタディツアーのような、NGOが主催する植林プログラムの参加者が現地でおとすお金が重要な収入になっているというのだ。商店の経営や、市場での生鮮食品の販売に従事する地域住民は、マングローブ林に分け入って直接、食糧を得ることもなければ、経済的な恩恵を受けることもほとんどない。そのため、残念ながらNGOが植林した木々によって生活に何か大きな変化がもたらされるわけではないのだが、NGOや学校によるスタディツアーなどの数多くの参加者が港を訪れ、現地で買い物をすることが結果的に

地域住民の役に立っているということが分かった。

Tam Thon Hiep 村以外の町村で NGO による植林活動について意見を聞いてみたところ、活動自体を知らないという人も半数ほどいたが、活動を知っている人は肯定的に評価していた。なお、聞き取りを行った世帯のうちほとんどの世帯は、カンザー地区のマングローブ生態系をプラスに捉えていた。ホーチミンの都心より気温が低く、空気もきれいで騒音も少ないと、どの住民も口をそろえて述べていた。中には、マングローブ生態系によってもたらされる環境の良さを認めつつも、カンザー地区の面積の半分を占め、近代的な産業に用いることのできないマングローブ林の存在にもどかしさを抱え、カンザー地区の経済的な遅れを懸念する声もあがっていた。

以下では、渡航中に直面した困難について述べる。

【言語面】方言に苦しむ

南北に長い領土を持つベトナムでは、大きく分けて北部、中部、南部それぞれの方言がある。今回滞在したホーチミンが属するのは南部方言の地域である。北部方言と南部方言では、声調の数や声調の発音の仕方それぞれ、単語の読み方や語彙自体が異なる。標準語である北部方言のベトナム語には声調が6種類、母音が11種類あり、声調がなく母音は5種類だけの日本語の母語話者にとっては、それらを正確に聞き取り、発音すること自体が難しい。

それに加えて、日本には、南部や中部方言を扱ったテキストや授業はほぼ皆無で、ほぼ勉強したことのない南部方言を聞き取ることに非常に苦労した。簡単な表現でも、発音の仕方が異なるため、聞き取ることが非常に難しい。自分の話す北部方言を何とか分かってもらうことができても、相手が何と言っているのか理解することは甚だ困難であった。

その状態でも何とかして調査を行うために、スタディツアー中に仲良くなったベトナム人の友人に通訳として調査に同行してもらうことにし、ベトナム語と英語を話せるAさんという友人が、通訳として調査に協力してくれることになった。

【文化の違いで苦労したこと】①感情をストレートに表すベトナム人

しかし、そう容易くことは進まなかった。次にぶつかったのは文化の壁である。ベトナム人は、基本的に思っていることは何でもストレートに表現する。日本人のように、「場の空気」を読んだり、オブラートに包んでものを言うことはなく、その時に抱えている感情を言葉や態度で露にすることが多い。ベトナム人の中でもAさんは特にはっきり感情を表すタイプであった。例えば、調査中に私が翻訳をお願いした質問項目の中に、彼女にとってひっかかる項目があれば、「これは聞く必要はない。」「なんでそんなこと聞くの?」とつっこみ、理由を説明しても、嫌悪感を態度で示すことがあった。また、私の研究内容についてかなり批判的な意見を述べることもあった。最初のうちは、自分の研究を批判的に見てもらうチャンスだと肯定的に捉えていたが、一緒に調査を始めて約1週間が経過してAさんの態度が徐々にエスカレートしていくうちに、だんだんと耐えがたくなっていった。しかし、私の調査に協力してくれていることを考えると、抱えている不満について直接言及することは控えていた。

ある時、ささいなことから口論になったのだが、とうとう私はAさんの態度についてためていた不満を漏らした。すると、Aさんは感じたことを直接的に言うのがベトナムの文化だと言い、

私が不満を感じたその時ごとにAさんに直接的に不満を伝えなかったことを責めた。日本人として自分の不満を相手に直接押し付けるのは幼稚で失礼だと感じていたが、彼女の言い分としては、はっきりものを言い、態度で示すことが「誠実さ」なのであった。

その時の口論の際には、もう一つもめた点があった。金銭的な問題である。Aさんは通訳の謝礼は不要だと言ってくれたため、調査にかかる費用はすべて私が負担しており、Aさんが欲しいというものを購入することも度々あった。1週間一緒に調査をする間、みるみるうちに所持金が減っていき、このペースで使っているのは所持金がなくなってしまうと危機感にかられていた。Aさんから、ベトナムではなんでも値切るのが文化だと聞いており、少しでも節約したい私は市場ではもちろんのこと、ローカルな小さなお店でも、ホテルでも値段交渉をしていた。しかし、Aさんは、遠慮なくどこでも値段交渉をもちかける私の態度に不快感を覚えていたのだった。お勘定、となると値切ろうとするがめつさはもちろん認めたが、「どこでも値切るのが文化だと言っていたのにどうして？」という不服な気持ちにもなってしまった。

口論になった際、双方が感じていた不満を正直にぶつけ合ったが、和解することはできなかった。決して「ごめん」と言わないのがベトナムの文化だとベトナム語の先生から聞いていたのだが、今回の口論も例外ではなかった。私はAさんに謝ったが、Aさんが私に謝ることはなかった。不満を互いにぶつけ、謝罪や和解もせず、私たちの間には嫌悪感だけが漂った。Aさんから調査の協力を辞めると申し出てきて、Aさんの態度に寛容になり切れなかった私もそれに賛同し、これ以上一緒に調査をしないことで合意した。

その時点では、9月が始まったところで、まだ1か月以上、滞在日数が残っていた。Aさんとの調査がうまくいかず、必要なデータはほとんど集められていなかった。かなり焦りがあり、あらゆるツテを頼って調査を手伝ってくれる人を探した。

ベトナムの大学と日本の大学とでは、夏季休暇の時期が異なり9月にはもう大学が始まっている。その中で、通訳として協力してくれる友人を見つけることは極めて困難であった。

スタディツアーの参加者で、連絡先の分かる友人全員に調査に協力してもらえないか連絡し、返事を待った。幸い、Aさんとのトラブルに同情した友人のTさんが9月の第1週目の週末に調査に協力してくれることになった。Aさんとの間に起こったトラブルを二度と繰り返さないように、なるべく思ったことはその場ではっきり伝え、不必要に値切ったり金銭的な問題に言及しないよう細心の注意を払った。幸いにも、Tさんは私の研究内容に興味を持ってくれ、もう2回調査に協力してくれることになった。

それから、再び様々なツテを頼って調査に協力してくれる友人を探した。現地の大学の社会科学系の学部で自分の研究テーマの要約と調査の協力者を募集していることを告知したりもした。最終的には、スタディツアーで知り合った友人だけではなく、その友人の友人や、そのまた友人、さらには調査地域で知り合った英語の話せる地域住民の方も、仕事の時間を調整して通訳として調査を手伝ってくださることになった。こうして、幸い最低でも週に1度～3度は調査を行えることとなった。

【文化の違いで苦労したこと】②役所の対応の仕方

カンザー地区内のうちm伐採が一切禁止されている中心地域及び、持続可能な範囲での伐採が

許可されている緩衝地帯で調査を行う場合、カンザーマングローブ保全管理委員会（以下、管理委員会と表記）の英語を話せる若手の職員らに調査に同行して頂けるとスタディツアーの主催者側から聞いていた。先行研究にも、私と同じようにスタディツアーに参加した学部生が、中心地帯や緩衝地帯で管理委員会の職員に同行してもらって調査を行った事例もある。しかし、実際に管理委員会で話を聞いてみると、英語を話すことのできるのはとても多忙なベテラン職員 1 人だけであった。さらに、中心地帯や緩衝地帯には船でしか行けないため、英語を話せる職員が仕事の都合上、中心地帯や緩衝地帯に行く際に私が同行させて頂くという方向で話が決まった。その職員からは、調査項目をメールで送ると、すぐに返事が来て「なるべく早く回答する。」という旨の返信を受けとった。しかし、その返信が来てから 1 週間が経っても何も音沙汰はなかった。催促のメールを数回送ったが、いずれのメールにも返信は来なかった。管理委員会の職員からは、連絡事項があればメールで送るように言われていたが、このままメールだけを送っていても拉致が明かないことは目に見えた。そこで、管理委員会の職員がよく行くレストランに私も行くようにし、朝ご飯や晩御飯の時になるべく管理委員会の職員と世間話をして仲良くなれるように心がけた。顔を合わせるうちに、職員の方どうしの食事会の席に招いていただけるようになった。ベトナムでは、相手のプライベートなことを質問することが礼儀であり、食事会では、英語と片言のベトナム語で家族や実家のある大阪のことを自分から話したり、相手に質問をして、コミュニケーションを積極的にとるように心がけた。

次第に職員の方々と距離が縮まってきたと感じられるようになったある日、管理委員会のオフィスに直接訪ねた。カンザー地区の人口や面積といった基本的なデータを見せてもらうためである。オフィスで要件を伝えると、ある職員の方がすぐに分厚い冊子をめくり必要なデータが載っている箇所のコピーを渡してくださった。当然、データ自体はベトナム語で書かれているのだが、職員の方の空き時間中にそれぞれの単語の英訳までも手伝って頂いた。さらに、私の滞在している部屋には wifi も空調もないことを知った職員から、オフィスで作業をすることを許可して頂いた。その翌日からお言葉に甘えてオフィスでデータの整理を始めた。作業をしていると、旬の果物やお菓子を分けてもらったり、文化である昼食後の昼寝に誘われたりと、まるでオフィスの一員のように温かく接して頂いた。オフィスではせっかくできた関係を壊さぬよう、言葉ができないなりに、なるべくベトナム語で話し、笑顔で礼儀正しくいようと心がけたことがよかったのかもしれない。

結局、職員の方に同行して中心地帯や緩衝地帯に行くことは最後までできなかったのだが、距離を縮めて、親しく接してもらえる関係をなんとか築けた



写真 5：通訳をしに来てくれた友人



写真 6：管理委員会の職員たちとの食事会

この時の経験から、人と人との繋がりをベトナム人がいかに大切にしているかを学ぶことができた体験だったと感じている。

【現地での生活の中での苦労：とにかく蚊が多い】

ベトナム南部は、とにかく蚊が多く、虫よけスプレーを塗布していなければ外に出て 10 分もしないうちに長袖長ズボンを着ていても数十か所は噛まれてしまう。虫よけスプレーにびくともしない蚊もあり、いくらスプレーを塗り重ねても、効かないこともある。

私の滞在先の部屋には wifi がないため、管理委員会のオフィスから発信される wifi の電波を拾うべく、いつも建物の外に出てメールなどをチェックしていた。返信に時間がかかることもあるので、wifi を使っている最中は虫よけクリームを塗り重ねた甲斐もなく、蚊の餌食になっていた。

ある時、蚊にかまれた箇所のかゆみがあまりにもひどく、日本から持って行った薬も効かなかったため、友人に教えてもらった薬(写真 7)を現地の薬局で買うことにした。カンザー地区には、食糧、日用品、プリペイド携帯の課金カードといった様々なものが売っている雑貨屋が多いのだが、薬局の場所が分からなかった私は、雑貨屋で薬の写真を見せて「これをください。」と片言のベトナム語で店員に伝えた。しかし、どうやらその店には置いていないようで、他にも何か言われたが、聞き取ることができずに困っていた。そこに、その店にバイク 2 人乗りでやって来た客が入ってきた。その客が店員と 2,3 言話したかと思うと、私に「(写真を見て) これを買いたいのか」と尋ねた。うなずいて、蚊にかまれた箇所を見せると、店には入らずバイクにまたがったままの「連れ合い」に何かを伝えた。バイクに乗るようにと、その客から雑貨屋の店員からも促された。どうやら、その客はバイクタクシーで店まで来たらしく、「連れ合い」ではなくバイクタクシーの運転手だったようである。その客は、親切にも、私を最寄りの薬局に連れて行くように運転手に伝えてくれたように思えた。不安な気持ちももちろんあったのだが、「せっかくだし、乗ってみよう、何かあればバイクから飛び降りればいい」という大胆な気持ちが湧いてきた。

言われるままにバイクにまたがると、運転手は何も言わずに走りはじめた。私が行ったことのない通りを奥へ奥へと進んでいく。「もしこのまま帰れなくなったらどうしよう」と不安を感じ始めたところで、バイクは止まり無事に薬局に着いた。薬局では、運転手が私に代わって必要な薬を説明してくれた。薬を買って終え、同じタクシーの運転手に、滞在先まで帰るための路線バス乗り場まで乗せて行ってもらった。

はじめは雑貨屋の店員に話しかけることすら緊張していたのだが、ほんの少しの勇気を出したことで、言葉ができなくても必要なものを買うことができたという少しの自信と、カンザー地区の地域の方の温かさを感じることができた。



写真 7：現地ではなんとか購入できたかゆみ止め D.E.P

■ 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回のベトナムに2か月滞在する中で、次の4点の重要性を深く感じた。

第一に、言葉が通じなくても、相手に喜びと敬意をもって接していることを態度で示すことの重要性である。滞在先にフランス人研究者の方がおり、親しくしていた。彼女はベトナム語が話せないにも関わらず、全く臆することなく易しい英語で人々に話し、管理委員会の職員や調査地である森林公園の職員たちと親しい人間関係を築いていた。彼女に出会うまでは、自分のベトナム語が完璧には程遠いため、誰かに話しけたり発言したりするのをためらってばかりいた。しかし、それでいては聞き取り調査などできるはずがない。大事なのは完璧に言葉を話せることではなく、相手にも伝わる態度で自分の考えや気持ちを表現することが相手に対する誠実さであり、その誠実さこそが言葉の壁を越えて相手と親しくなるための秘訣なのではないかと感じた。

第二に、自分の考えを伝えるときには考えの骨子のみを簡潔に伝えることである。相手と自分のどちらか一方が流暢に話せない言語を通してコミュニケーションをする場合、最も本質的なことを一言、二言で表し、はっきり伝わるようにしなければならない。非本質的なことを付け加えてしまうと、相手の誤解を招きやすく、意味の分からない言葉を話された時に覚える不安感は大い。そのため、会話の際は多少ぶっきらぼうに聞こえてしまうかもしれないが、はっきりとものを言うように心がけていた。

第三に、「今やらなければもう二度とチャンスはないかもしれない」と言い聞かせて勇気を出すことの重要性である。調査で出会う人や事物は一期一会である。何か気になったことがあれば、その時にやらなければチャンスを逃してしまう。現地では、聞き取りを断られることもあったが、ほとんどの世帯が協力してくれた。チャンスは自らつかみに行くものであると言い聞かせ、実行したことが多数の世帯に聞き取りを行うことができた原因の一つではないかと考えている。

第四に、調査地を最低限、衛星写真などで下見しておくことの重要性である。海外調査は、調査許可、言語、金銭などの様々な制約を抱えながら行っていかなければならない。その中で、時間を少しでも無駄にしないよう、Google Earthなどで事前に調査をする村や道順を調べておき、ストリートビューを使って、聞き取りを行うおおよその位置を把握するように心がけた。これによって、調査中にかかる移動時間が短縮でき、調査を行う時間を極力長くすることができた。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の渡航中に、上下水道の整備とトイレに興味を持ち、大学院に進学してベトナムのトイレ環境について研究しようと考えている。

カンザー地区は、まさに発展途上である。ほとんどの地域や建物で上下水道が未整備で、停電が起こることもある。特に、最貧困層の人々はニッパヤシの葉でできたドアも窓もない家や船上に居住しており、前近代的な生活が営まれている。その中で人々が細々とつましく、かつたくましく生きている姿に感動した。彼らの生活を間近で目にする中で、特に気になったのがトイレであった。下水が未整備なため、池などにそのまま用を足すか、用を足したあとに貯めた雨水で押

し流すかのどちらかである。夜になると異様なほどのアンモニア臭が立ち込める世帯もあった。先行研究では、排泄物の垂れ流しにより河川の水質が悪化し、皮膚病を患う者もかなり出てきているという。今回の渡航中に抱くようになった問題意識を活かしてトイレ環境についての知識を積み、大学院でもフィールドワークをし、下水道整備のための政策提言につながる研究をしたいと考えている。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

- ・志望書は教授や先輩や友人にチェックしてもらうことをおすすめします。どんな人が読んで面白いと思ってもらえ、問題意識が伝わる内容の計画書を作ることができたらベストだと思います。
- ・具体的な問題意識をもって、入念に調査地の情報を下調べしてから渡航すると、現地が無駄にってしまう時間を最小限にできると思います。
- ・調査地についての知識は、先行研究からだけではなく、Google Earth を使って衛星写真を見て大まかに地理を把握することの他、SNSなどで最新の情報を集めることも重要です。
- ・毎日調査できるわけではないので、勉強したい本を調査に持っていくと気晴らしになっていいですよ。
- ・渡航中は、何が起こるかは分からないので何か問題が生じても、その都度柔軟に調査の方向性を修正したらいい、くらいの心の余裕をもつと気負いすぎたり、焦りすぎたりせずに調査ができると思います。

■ 主な奨学金の使途

*スタディツアー参加費、現地調査費

*渡航費

*海外旅行保険、予防接種

*食費、現地交通費、通信費 など